

一面ガラス張りの館内からは、立山連峰を眺めることができる

様々な分野の第一線で活躍する著名人たちを起用して、開館の準備を着々と進めている富山県美術館。その力の入れようからは、行政の気合いと県民からの期待の大きさを伺い知ることが出来る。建築を担当した内藤廣は初めて環水公園を訪れた時、遊具で元気に遊ぶ子どもたちと美しい

立山の姿に感銘を受け、素晴らしい景色を美術館に取り込もうと、建物の東面（立山側）を一面ガラス張りにしたそうだ。天気が良い日には、2階と3階の窓辺から立山連峰を眺めることができるので、富山の雄大な自然に驚かされるだろう。

美術館の顔となるロゴマークは、グラフィックデザイナーナーの永井一正によるもの。

富山の「T」、アートの「A」、デザインの「D」を組み合わせた。明るいブルーは、立山連峰の稜線が映える青空。深いブルーは富山湾を表し、富山の自然の姿を表現している。「アートとデザインをつ

なが、世界でまれな美術館」と銘打って、世界的なコレクションを今までにない切り口やテーマ、見せ方で展開していく富山県美術館の船出を力強く後押しするロゴマークである。



グラフィックデザイナーの永井一正が手掛けたロゴマーク。



窓越しに見える立山連峰の雄大な自然は感動的だ。

20世紀美術を中心とした、国内外の名作をコレクション

富山県美術館では、20世紀初頭から現在に至る美術の流れを、世界・日本・富山の3つの視点から展望している。収蔵作品の中心を担うのは、20世紀美術の流れが俯瞰できるような作品ばかり。

海外の代表的なアーティ

ストとしてはピカソやミロ、シャガール、日本の作家では岡本太郎や斎藤義重、富山県出身の前田常作らの作品を多数コレクションし、国内外の現代美術の歴史を伝える富山県美術館。全面開館に併せて、藤田嗣治が1929年に描い

た作品『二人の裸婦』の購入計画を進めている。新しい美術館の幕開けにふさわしい一作となるだろう。同館が掲げる、「アートとデザインをつなぐ」様々な企画展が続々と予定されている。今後の展開にも注目したい。



上/ジャクソン・ポロック《無題》1946年
下/アンリ・ド・トゥールーズ＝ロートレック
《マンジの肖像》1901年
掲載作品は富山県美術館蔵